

虎頭山に抱かれた坂のまち

「赤平」の「平（ヒラ）」は「坂」を意味すると考えられており、その地形は虎頭山の稜線から西と南の方向に急傾斜を形成しています。首里城から北側一帯は「北方（にしかた）」と呼ばれる上級士族の屋敷街で、赤平にも琉球の著名な政治家の屋敷がありました。

虎頭（瀬）山

首里城の北北東に位置する標高約百三十メートルの琉球石灰岩の丘陵です。頂上の岩山が虎の頭に見えたことから「虎頭山」「虎山」とも記されます。首里八景「虎山松濤」のひとつとして知られ、松や月を題材にした詩歌が多く残されています。現在、頂上部は虎瀬公園として地域の人々に親しまれています。

蔡温旧宅跡

蔡温（一六八二―一七六一）は、琉球を代表する政治家です。久米村（現那覇市久米）出身で、沖縄名を具志頭文若、号を澹園と名乗っていました。一七二二年に尚敬王の国師（教育係）となり、二八年には三司官となりました。二五年にわたって国政に携わり、羽地大川の改修をはじめとする農林土木事業を推進する一方、『御教条』や『独物語』などの多くの書が残されています。

蔡温は久米村出身者ながら、王から赤平に屋敷を二回も賜りました。一カ所は国師に就任したとき（虎頭山の

老松が林立する虎頭山の眺望



蔡温旧宅跡

近く、二回目は三司官に任じられた翌年で、尚敬王の長女と蔡温の長男翼の婚姻にちなんだものです。「一件目の屋敷は「澹園」と呼ばれており、蔡温は「澹園即興」という漢詩を残しています。

宜湾朝保生家跡

宜湾朝保（一八二三―一八七六・唐名向有恒）は琉球末期の三司官で、著名な歌人でもあります。生家の宜野湾家は宜野湾間切の総地頭家であり、三司官を二人輩出した名家でした。当初は宜野湾を名乗っていましたが、一八六〇年に尚泰王の次男尚寅が宜野湾間切を領して宜野湾王子と称したため、同名を避けて改名しました。

朝保は三男でしたが、父や兄の死によりわずか十三歳で家を継ぎました。その後各職を歴任し、一八六二年に三司官に就任。六八年に明治政府が成立すると、七一年に維新慶賀使の副使として上京し、尚泰王を琉球藩王にする

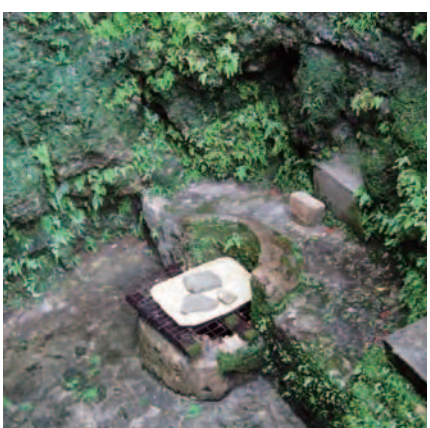


明治維新慶賀使の一行。前列左が宜野湾親方朝保（那覇市歴史博物館提供）

との命を受けて帰国しました。当初は薩摩支配からの脱却を意味するものと受け取られて優遇されましたが、琉球処分が具体化すると次第に非難が集中し、七五年に三司官を辞任し、その翌年に失意のうちに亡くなりました。

和歌人としての顔を持つ朝保は、後に宮中歌道御用掛となった薩摩藩士八田知紀に師事しており、『沖繩集』『沖繩集二編』を編集、『松風集』の私家集もあります。また、上京した際、吹上離宮の歌会で詠んだ歌に、「水石契久」と題し「動きなき御世を心のいはかねにかけてたえせぬ滝の白」とあります。

現在、私有地内にあり、県道八二号線（環状二号）の歩道より見ることができます。



仏の坂（フトウキヌヒラ）

虎頭山へ通じる坂道で、坂の途中右側に火災を防いだり、病気をしないようにお祈りする御嶽があるので、仏の坂と呼ばれています。昔ながらの石畳道が残されており、歴史を感じることができます。



凡 例	
	県 道
	一般 道
	バス路線・停留所
	信号・主要交差点
	モノレール路線・駅
	公民館
	病院
	商店・コンビニ・スーパーマーケット等
	河川・池
	公園範囲
	歴史資源
	その他の歴史資源



ユーリー井戸（ユーリーガー）

王府の許しを得て掘った井戸だと伝えられています。王府からお許しをいただくことを「ユーリー」ということから名付けられました。井戸の東側小高い丘には、祠が置かれ拝所となっています。



耳芽井戸（ミンジャガー）

王府が掘った井戸と伝えられ、耳のような似た形をしていて、いつも湿っていたので、耳芽井戸と呼ばれるようになりました。いつも豊かな水に恵まれ、どんな早魃にも涸れることがありませんでした。戦後、埋められ、近年に掘りなおされましたが、水は湧きませんでした。その時、掘り出された黒石がまつられています。

